

70 《聖マタイの召命》・真実のストーリー

カトリック教会は誤情報を世界に拡散すべきでない

2024

真鍋友範



- * 1 親指 「ご用は私ですか。」: 胸に向けた
- * 2 人差し指 「それとも、隣の眼鏡の収税人ですか。」
- * 3 左手のひら 「あなたの質問に答えよう。」: 肘を曲げ、開いて見せた (受容)
- * 4 右足移動 メガネの収税人の顔の見える左位置への、視点の横移動動作
- * 5 父なる神からの導きの光線が、内窓枠に沿ってマタイの頭頂部・(点光)に当たる。
- * 6 イエス右手の回転動作 「あなたの向こう側の眼鏡の人です。」—「私に従いなさい。」
- * 補足1: イエスの目と、廻した手の甲の止まる位置の延長線上に、目指す相手の顔がある。
- * 補足2: 背を向ける若い子収税人の剣の軸線は、イエスの頭頂部に向かっている。誘導線
- * 補足3: イエスの、力を抜いた右手首回転運動の軌跡: ホワイトの曲線
- * 補足4: イエスの意思・召命相手を示す: グレーの曲線

1 真実

【イエスの不明確な指差し】に対し、【髭男が、自身への不明瞭な指差しで答えた】、という内容は、完全に間違っている。(上記図版参照・数字順の動作再生)

【ストーリーが真逆】なのだ。

【髭男の二段階の明確な質問】に、【イエスが三段階の動作で明確に答えた】内容が描かれているのが、《聖マタイの召命》だ。

ストーリーはリアルな描写であり明確だ。カラヴァッジョの描いた内容に【不明確さは皆無なのだ。】

2 この真実を見えなくした責任者は誰か

1番目の責任は、ローマ・カトリック教会にある。

あまりにも劣悪な聖堂内の展示環境が災いして、真実は四百年以上に渡り封印されたままであったのだ。

【展示環境を検証すれば、およそ絵画を鑑賞する状況としては、劣悪だ。】

3 これにより、何が起こるのか。

- 1) 画面左側に重点があるかのように錯覚する。つまり、最も近い位置の若い収税人に対し、必要以上に意識が向く。
- 2) イエスの右手は見えるが、イエスの左手や、イエスの左側に踏み出した右足の状況は、完全に無視されてしまう。
- 3) 結果的に、正しい場面状況が、現場では読み取れなくなる。

4 更なる責任者

2番目の責任は、当時の美術史家であるベッローリにある。

ベッローリは17世紀のイタリアの美術史家であったが、最悪なことに、16世紀の画家兼美術史家であったジョルジョ・ヴァザーリとは異なり、デッサンを知らない画家としては素人の人物であり、しかも、カラヴァッジョ絵画が大嫌いであり、悪意の先入観から、【カラヴァッジョ絵画を正確に認識することができない美術史家】だったのだ。

そのベッローリは、ローマ・カトリック教会からの一定の評価を得る立場であったので、彼の誤った認識は、そのままイタリアにおける《聖マタイの召命》認識への共通認識となり定着した。

現在でも、ローマに行き、サン・ルイージ・デイ・フランチェージ聖堂を訪れた観光客は、ローマの公認ガイドさんから、誤った公式見解を聞かされる。

しかし、公認ガイドさんが悪いのではない。ローマ・カトリック教会関連美術史家の正確な事実への追求怠慢から、いつまでも事実が明らかにならないのだ。

地動説をつい最近まで400年間放置し、公式に認めなかった宗教団体だから、その頑固さも桁違いだ。ガリレオ・ガリレイも墓の下で苦笑いだ。

4 その次の責任者

3番目の責任は、理解不足なドイツ学派の美術史家や大学関係教員だろう。

ドイツのアマチュア研究者達もまた、髭男の立てられた親指を完全に見落とした。

【つまり、カラヴァッジョのリアリズム描画志向を認識しながらも、実際にカラヴァッジョの描いたリアルな描画内容そのものを見落としている。】

例えば、イエスの身体動作を一度でも模倣したことがあるのだろうか。【描かれているイエスの複雑な身体動作と、単純な指差し動作との矛盾】に気付けないのが、私には不思議だ。

また、中央髭男の指先の方向決定に執着したものの、デッサンの理解が不足し、指先がうつむいた若者に向いていると誤った決定をした。

そもそも構図は【左右画面圧縮構図】であり、イエス一行は画面の右側、数メートル離れた外側にいることに気づいていない。

そこから指差したのなら、イエスは床を指差すことになる。説明に矛盾があるのだ。

恐らくだが、【登場人物の細部の身体動作が読めなかった】為、最初から、【立っているかのように感じる眼鏡の収税人は、候補から除外され、主観的な判断にまみれた誤断定をした。】

そして、真実は闇に葬られた。

そもそも、カトリック教会からすると、プロテスタント教国美術史家の意見（俯いた若者説）など、そのプライドから、受け入れる余地もないのかもしれない。

5 主観的な判断では、真実が断定できない

カラヴァッジョが、モデルまで使って、【身体動作のリアリズム】にこだわったにも関わらず、美術史家の側は、そこを見ずに主観的判断に終始しても、完全な理解は得られないはず。

【カラヴァッジョの絵画そのものに、もう一度立ち帰らなければならない】だろう。

6 ある大問題がある。

例え、【現地で何十回見ても、カラヴァッジョの描いたイエスの動作の細部が見えない。】

私、以前、毎年のように、5～6回見続けたが、現在の展示して環境では、画面奥側の細部が見えないのだ。

特に、【重要なイエスの左手と、左に踏み出した右足が見えない。】（図版3・4）

5 改善策

1) ローマ・カトリック教会は、作品の展示環境を改善すべきだ。

作品に影響の少ない LED 光線などで、もう少し明るく作品を照らし、イエスの左手や右足の位置まで判読できるように改善すべきだ。

2) また、【左斜め下からの作品鑑賞を止めるべきだ。】

しかし、コンタレッリ礼拝堂の狭さからして、かなり困難だ

3) 礼拝堂の作品正面に立ち止まる時間に制限をかけてでも、正面から鑑賞出来るよう改善すべきだ。

現地での観賞環境が改善されるなら、小生が2013年に発見したカラヴァッジョ作《聖マタイの召命》における召命対象者の新事実は、容易に世界中の鑑賞者にも理解されるだろうが、難点は、相手がローマ・カトリック教会であることだ。

6 カラヴァッジョの真意は、現代人に伝わるか

とにかく、ガリレオ・ガリレイの地動説を近年まで認めず、400年間放置した宗教団体だから、頑固さは相当なものだろう。

【関係者が行動を起こさない限り、カラヴァッジョの描いた内容の真意は、これからも永く葬られ続け、カトリック信徒や無明な現代人は、誤情報を享受し続けるのではないか。】